

『うつほ物語』『楼の上』巻・京極邸の庭園造詣

—子の日の松といぬ宮造型から—

岩原真代

はじめに

『うつほ物語』『楼の上』巻において、仲忠は京極邸の再興を、「仲忠、これこそは、一生の大きな大事に思ひ侍れ」（八五一頁）¹と宣言し、秘琴伝授と俊蔭追善供養、そして、道心と学問の成就を願う。京極邸再興には、父兼雅や愛妻女一宮の意向は入れられず、清原家の悲願として始動する。仲忠の京極邸再興の意図と、京極邸の庭園構造とはどのようなものであったのか。物語の志向性を、京極邸の庭園造詣と人物造型から明らかにする。²

『うつほ物語』の、京極邸を中心とする邸宅のあり方は、太田静六氏による復元³のほか、特に楼閣に関して研究が重ねられている。坂本信道氏は、平等院鳳凰堂の浄土変相図中の宝楼閣や寺社建築様式との一致と「極楽浄土」の再現の意を説かれ、野口元大氏は、モデルとして中国様式を備えた源融邸の洞清楼などを想定され、道教の儀軌や閉鎖性を指摘される。⁴伊藤禎子氏は楼閣の禁忌性と京極邸の歴史の重さ、俊蔭一族の権力構造の変容を指摘される。⁵その他の庭園について、葛綿正一氏は庭園の美学とそこから排除される三奇人のあり方から、秘琴の卓越性を表す役割を指摘され、西本香子氏は、種松の吹上

邸に神仙思想と王権を、また水辺の桂邸に聖域をみる。⁸

庭園描写は物語の主題を反映しているが、それでは、仲忠はどのような意図と指向性を以て京極邸の空間を創り上げたのであるうか。物語の最終局面に造営された京極邸の庭園には、『うつほ物語』そのものの志向性も表れてくるはずである。

一 京極邸再興

次は仲忠が母俊蔭娘に対して京極邸再興の意志を示す場面である。

「…この殿も、さるべきにも侍らず。『京極を、さるべき様に造りしつらはせ侍りて』となむ思ひ侍る。よろづの所よりも、かの殿をなむ、しかもこのせむに、本意のごと侍るべき。殿や、『便なし』とのたまはせむ。仲忠、これこそは、一生の大きな大事に思ひ侍れ。尚侍のおとど、「さらなる御ことなり。『便なし』とありとも、それにやは。ただのたまはむにのみこそ。かしこは、いと世に異なり。年ごろ思ふに、なほ、ただ渡り住ままほしう思ひ侍り。『心のどかに、昔を思ひ出でて、さべき尊きことをもせさせ、行ひもかしこにてせむ』となむ思ひ侍る」…「よく思し仰せらるるこ

となり。仲忠も、世の中といふもの、常なきものなり、静かに、時々籠り侍りて、見給へまほしき法文書どもも侍り、『さるべき昔の御ためのことどもも、いかでか』と思ひ給ふるも、公私と、心身の暇なく侍りなむ。静かなる御行ひ、殿の御代の間はせさせ給はじ。』

〔楼の上・上〕八五一頁）
仲忠と俊蔭娘の共通の願いは、再興に伴う「昔」への回帰である。そもそも京極邸は、俊蔭が「心ありし人の、急ぐことなくて、心に入れて作りし所」(二五頁)であり、室礼や結構には俊蔭の心魂が籠もる。しかし、仲忠母子は生活苦から京極邸を離れ、うつほに流離する。藤原兼雅の三条邸も、本来は梨壺の料であり、「蔵開・中」巻以降、女三宮以下、妻妾達も転入しており、母子の完全な所有ではない。清原一族の根幹に関わる京極邸再興は、老病死を意識する俊蔭娘の流離と終の住処の問題に関わっていく。また、仲忠は京極邸建築のため、二院を周旋して「暇」を求めるが、その過程で京極邸が「もと、名高き宮」(楼の上・上)八五四頁)であり、俊蔭以前には、嵯峨院の伯母宮の邸宅であったことを知る(「滋野の王布留の朝臣の内方は、わが伯母にいまそがりし宮」八五八頁)。京極邸の再生は故俊蔭と、邸宅の荒廢に伴って忘れ去られていた祖霊達の直接的な鎮魂行為である。しかし、当初、ひたすらに「静かさ」を求めた仲忠の再興案は、仲忠が要人である以上、俗界から切り離すことはできず、嵯峨院の行幸要請によって公式行事化していく。俊蔭娘といぬ宮の京極邸への移転行列は「賀茂の祭」(八六九頁)に比肩されており、これまで、一家伝であった秘琴伝授は、ここで初めて公認化される。伝授の間も仲忠は俗界との渉外を受け持ち、行幸の準備に奔走する。仲忠は諸雑事を一身に引き

受けることで、伝授の場の聖性の維持と公開の場としての性格の両立を図る関となる。また、仲忠は院の臣としての姿勢を崩すことなく、その献身ぶりに表れるのは、二院の存在の重さである。行幸を強いる嵯峨院は、三代にわたる俊蔭一族の流離を見守る位置にある。

それでは「楼の上」巻における二院の参加意義はどこにあったのか。秘琴披露の後、二院は京極邸の庭園を回遊して賞美する。「楼の上」巻、京極邸落成時の饗宴でも、庭園の来賓達は、二院に見せたいもの、と噂し合い、その存在を意識している(八七四頁)。物語の終末に至って、二院の存在は重みを増し、京極邸逍遙におけるその言動には、邸宅を宮廷制度の中に定位付ける役割が見えてくる。次に、二院の視界から京極邸の庭園造詣を検討する。

二 いぬ宮と松——嵯峨院大后の宮造型との連関——

「楼の上・下」巻、秘琴披露と俊蔭、京極邸、俊蔭娘への叙爵の後、二院は京極邸の庭園を逍遙して、楼に登る。京極邸の庭園造詣はまず、朱雀院の視座から、垂直に落下する大滝と植生の妙が確認される。山の高きより落つる滝の、唐傘の柄さしたるやうにて、岩の上に落ち懸かりて湧き返る下に、をかしげなる五葉の小松、紅葉の木、薄ども、濡れたるに従ひて動く。いと面白きを御覧して、朱雀院、(朱雀)住む人も宿も分かねば円居して世を尽くすべき心地こそすれ
右のおとどに、「うらやましの家のあるじや」とのたまへば、いととく、

(兼雅)「やもせば枝さしまさるこのもとにただ宿木と思ふばかりを

今日よりは、まして、いとかしこくこそ」と啓し給ふ。(九四〇頁) 楼の高欄から見える築山の「唐傘の柄」の様な滝は「仙境のシンボル」であり、木立群とともに異国情緒を醸している。

朱雀院は「住む人も宿も分かねば円居して」と、兼雅に家褒めの和歌を贈り、兼雅は、「枝さしまさる」と、あくまで仲忠の徳のなせるものと謙遜し、観覧を謝す。京極邸再興において門外漢であった兼雅は、京極邸の庭園を通して院との関係をこれまで以上に強めていく。

ここでは御詠歌中に「円居」の語があることも見過ごせない。「円居」は君臣和楽の定型語彙であり、『うつほ物語』中十八例確認される。¹¹しかし、「源氏物語」でも、「をりふし、御前などのわざとある歌詠みの中には、円居離れぬ三文字ぞかし。」(「行幸」③一三八頁)と評されるように、形式的で興趣や創意工夫に欠ける。作例は三代集でも五例程度であり、他の散文作品にも少なく、『うつほ物語』の和歌を特徴付ける歌語である。初出は神楽歌の「神」、

神葉の 香をかぐはしみ 求め來れば 八十氏人ぞ 圓居せりける 圓居せりける (採物「本」二九七頁)¹²

である。御室山の神前の神葉に宮人が集う内容であり、『うつほ物語』でも十一月御神楽の儀式(「嵯峨の院」一八〇頁、「菊の宴」三〇六頁)に神楽歌「韓神」とともに引用されている。『うつほ物語』の「円居」の歌例を見ると、その内五例が松陰に関わって使用されている。

①民部卿源実正、「春日の宮」、

氏人の円居る今日は春日野の松にも藤の花ぞ咲くらし

(「春日詣」一四〇頁)

②親王見給ひて、かく書きつけ、民部卿殿に奉れ給ふ。
木隠れは陰に円居るもと松の根より生ひたる末にあらずや
：藤宰相殿、

円居する千歳の陰のうれしきはもるともなげの松の陰かは (「祭の使」二二四頁)

③(良佐)円居していづれ久しと藤の花懸かれる松の末の世を見む (歌題「藤の花を折りて、松の千歳を知る」「吹上・上」二五六一頁)

①は春日社頭での題詠歌であり、源氏と藤原氏の円満を歌う。歌題の中には「円居に足らぬ月」(一四三頁)もあり、円居に遅れる友を下弦の月に喩えている。¹³②は六月、源正頼邸釣殿における納涼時の唱和歌、③は吹上行幸時の題詠歌であり、いずれも饗宴の主催者が松陰に喩えられている。『日本書紀』「孝徳紀」には天皇が、大槻の樹下で群臣に忠誠を誓わせる例がある。

乙卯に、天皇・皇祖母尊・皇太子、大槻の樹の下に、群臣を召し集めて、盟曰はしめたまふ。

(大化元年六月十九日条 下巻二七〇頁)¹⁴

大化の改新後の新体制は、大槻の下での誓約によって固まり、中央集権を志向する。先の①②、正頼政体下における樹下の唱和歌は、源家を中心とする権力の集中を、ことある毎に確認し合うものとなっている。先に三田村雅子氏が詳論される通り、物語における木の陰の喩は、一族の過去、権力、庇護、さらには自己同一性にも関わっている。¹⁵

ここにもその論理が展開するが、特に、『うつほ物語』の場合には松の描写が特徴的である。

『うつほ物語』中の「松」詠を見ると、いぬ宮の生誕儀礼に関わる例が多い。次はいぬ宮の七日の産養の歌群の一例である。

(中務の宮) 木高くて涼しき陰に宮人の円居するまで生ひよ姫松
〔蔵開・上〕四八六頁

新生児いぬ宮は「姫松」に喩えられ、将来、その陰の下での「宮人の円居」が幻視されている。以下、同種の賛歌が、

(忠雅) 二葉より生ひ並びつつ姫松はなみをはまして千代は過ぎ
なむ

(源実正) 若緑二葉に見ゆる姫松の嵐吹き立つ世をも見てしか
(源涼) 姫松を林と生ほすこの宿にいく度千代を数へ来ぬらむ

(源忠澄) 緑子の多かる中に二葉よりよろづ世見ゆる宿の姫松
〔蔵開・上〕四八六〜四八七頁

と繰り返される。網谷厚子氏はいぬ宮誕生と姫松の喩を、「正頼が外戚として繁栄していく将来を予祝する喩」とされ、首肯されるが、更にこの喩には『うつほ物語』の志向性も読み取れよう。いぬ宮が成長し、繁栄する未来の理想像は、成長した大樹の下で、人々が「円居」る姿である。神楽歌を下敷きに唱和されることで、一座の共通認識となっている。「松」詠は子供の成長を見守る定型ではあるが、いぬ宮の場合には、以後も「姫松」の喩が繰り返される。

〔蔵開・上〕巻、いぬ宮の五十日の祝いの唱和歌では、外祖父の朱雀帝からの松鶴の洲浜と餅、贈歌に和して、大宮以下、一族がその将来像を書きつけていく。

(大宮) 我下りて松の餅を食はずれば千歳も継ぎて生ひよとぞ思
ふ

(仁寿殿) 生ひの間にちをのみ知れる緑子の松の餅をいかが食ふ
らむ

(女一宮) 食ひ初むる今日や千代をも習ふらむ松の餅に心移りて
(仲忠) 千歳経る松の餅は食ひつめり今は御笠の劣らでもがな

(忠康) 姫松も鶴も並びて見ゆるにはいつかは御笠のあらむとす
らむ (五一九頁)

祖母仁寿殿女御主催の祝儀は、仁寿殿女御が儀式に不慣れのため、曾祖母の嵯峨院皇女大宮が招かれ、助力して成る。大宮は「我下りて松の餅を食はずれば」と、いぬ宮に「食」を通じて自身の長寿と栄華の幸運を転写する。いぬ宮の生誕儀礼は、嵯峨院皇統の女性の系譜を遡及して行われ、その協力と系譜は、贈られた洲浜の黄金の杓に書かれた御製に唱和し、順に書き付けることにより、物語に定位されている。ここでの「姫松」と「御笠」の縁語は慶寿と子孫繁栄を予祝するものであり、また、歌語「まつかさ」は「松蓋」に通ずるとい²⁰う。

更に、「蔵開・下」巻、俊蔭娘主催のいぬ宮の百日の祝いは、正月乙子の日が重なる。「子の日の松」といぬ宮生誕儀礼との結びつきは極めて強い。

(仁寿殿) よろづ世の行く方も知らで生ひ出づる小松に今日ぞ子
の日知らする

(藤壺) よろづ世の子の日知るらむ姫松につくべき言の我もある
かな

(兼雅) 百日川今日と知らせつ乙子をぞ数へて千代となせよ姫松
(仁寿殿) 生ひてさは百日川にやなりにける子の日を千代と数ふ
べき松

(俊蔭娘) 数へたる今日を今日知る姫松は千代てふことは習はざらめや

(女一宮) 姫松は子の日を多く数へつつあまたの世をも過ぐすべきかな

(仲忠) 姫松は乙子の限り数へつつ千歳の春は見つと知らなむ
(六〇五〜六〇六頁)

正月の年中行事「子の日の松」は経年の象徴であり、千歳の春や長寿を呼び込むコードとなる。ここでは乙子の日の設定も注意されよう。「菊の宴」巻、嵯峨院大后の宮の六十賀も正月二十七日の乙子に行われ、賀宴では、次のような月次屏風歌、唱和歌が示される。

A 正月。子の日したる所に、岩に、松生ひたり。てうに、鶴遊べり。
右大将

岩の上に鶴の落とせる松の実^は生ひにけらしな今日に会ふとて
(御屏風歌、三二五頁)

B 御挿頭、尚侍の殿、松の下に、鶴据ゑて、
(尚侍) おのれだに齡久しき葦鶴のねのひの松の陰に隠るる

(大后) 我一人鶴と松とを見るよりも一つ一つは君にとぞ思ふ
(三二七頁)

C (大后) 常よりも今日のねの日のうれしきはひく松の緒を聞くにぞありける

(あて宮) 野隠れて風の調べの松のねは今日もひかれぬものにぞありける
(女楽後の唱和歌、三一九頁)

嵯峨院大后をめぐる賀の歌群は、「子の日の松の蔭、松の実、鶴、松風の音、根、ひく」と、定型ながらもいぬ宮関連の儀礼歌に共通する

歌語を揃えている。子の日の松の「ね」を「ひく」行為は、弾琴の縁語である。C、更に六十賀では、后の宮、女一宮、あて宮らの琴弹奏があり、あて宮の音質が仲忠と通うことも知覚されている。儀礼の場に弾琴が加わることも、秘琴伝授を期待されてきたいぬ宮関係の儀礼と共通する。嵯峨院大后は、俊蔭娘の琴の音質を知悉する人物であり、十年後の京極邸行幸にも娘嵯峨院小宮とともに参加する(「楼の上・下」九一―四頁)。大后は、「后と聞こゆる中にすぐれ給へる太皇太后宮」(九二―八頁)と、世評も高く、嵯峨院と並んで、皇統の女達の視座から秘琴伝授の行方を見定める視点人物であり、その長命と栄華は、后がねとして養育されるいぬ宮の将来像を暗示している。

「楼の上・下」巻、いぬ宮の秘琴弾琴では、感極まった嵯峨院が高麗笛を合奏して、新羅舞を舞い、やはりいぬ宮を「姫小松」に喩えている。

「さらに、稚児の弾き給ふやうならず。『手のなりにけること』と、いみじくあはれなるに、え堪へず」とのたまはせて、立ちて舞はせ給ひつつ、

(嵯峨) 姫小松ひきつることに忍びあへず白き頭の新羅舞せむ
(九三六頁)

御詠の上句にも、子の日の「小松引き」と弾琴が掛けられており、『うつほ物語』では子の日の松は弾琴に密接する語といえる。「姫松」の喩は、涼と仲忠の婚姻儀礼歌(「沖つ白波」四四九頁)や朱雀帝から俊蔭娘への未練の贈歌にもあり(「姫松の鶴の千歳は変はるとも同じ河辺の水と流れむ」「尚侍のかみ」四三三頁)、異能を持ついぬ宮の成長には、秘琴伝授に加えて、皇統や諸家の系譜など各世代の記憶と希望、

が集約した形で投影されていく。このようないぬ宮の成長と「松」の喩系は、やがて京極邸の子の日の松に象徴され、集約される。

三 京極邸の庭園構造——樹形から——

次は、嵯峨院視点から認知された京極邸の庭園の樹木描写である。

嵯峨の院、楼の上にさし上りて、「いと厳めしき森のやうにて、桜の木あり。あはれ、この木見るこそ、いと恐ろしけれ。昔、十余歳にて、春ごとに来つつ、書見るとて、見困じて下りつつ遊びし。いでこの楼ならば、及びなむや」とて、

（嵯峨）春来てはわが袖懸けし桜花今は木高き枝見つるかな

近う候ひ給ふ源中納言、

（涼）かねてより雲懸かりける桜花むべこそ末の木高かりけれ
宮内卿、歳七十なる、「あはれ、昔を思ひ出で待れば、あの岩のものとの松の木は、かの山に侍りしを、子の日におはしまして、引き植ゑ侍りしぞかし」と奏し給ふ。七、八樹ばかりして、上に平みたる松を見やりて、宮内卿兼覽、

（兼覽）引き植ゑし子の日の松も老いにけり千代の末にもあひ見つるかな

この歌を、嵯峨の院、いみじうあはれがりたまひて、

〔楼の上・下〕九四〇〜九四一頁

嵯峨院は「厳めしき森のやう」な大桜の枝振りに少年時代を想起し、「子の日の松」の成長ぶりに積年を回顧する。三田村雅子氏は、物語の結末に巨木を配する伝統があることを示唆され、当該場面に関して、

「桜は王権構造を表し、その隣の松の巨木は臣下の奉仕を語るもの」であり、巨木に一族の繁栄を象徴させている、とされる。²²⁾ 加えて、ここでは「子の日の松」の樹形が語られていることも注目されよう。

俊蔭以前から当地に根付く大樹は、長寿を保つ嵯峨院に擬され、また、松の陰を理想とする『うつほ物語』の指向性を再認識したものである。松の「上に平みたる」樹形は、解釈に揺れがあるが、當麻良子氏は、漢詩文に見られる蓋型の松「松蓋」であり、「神仙思想やユートピア」を象徴すると指摘される。また日本の民間信仰にある「笠松」や「笠杉」の神聖性を示すものにも当たる。『延喜式』『瑞祥』でも、

平露「樹名也。其形如蓋生於庭。以候四方之正也。一方不正則應一方而轉傾也。」（瑞祥・大瑞）

・華平「其枝正平。王者聽強則仰。弱則低也。」（五二七〜五二八頁）²⁵⁾ など、やはり蓋型や枝を平らに張る樹形が瑞兆とされている。千年の松は「偃蓋」ともいい、天蓋のイメージを持つ。なお、『萬葉集』巻五「梅花歌三十一首」では、「松蓋」とともに、「天を蓋にし地を坐にし、膝を促け觴を飛ばす。」（②四一頁）とあり、理想の空間として蓋下の時空がある。京極邸の庭園は、「唐傘の柄」状の滝、二棟の楼閣、大木群を縦軸に、枝を平らに大きく張る樹形を横軸にとる立体構造をなし、その下に人々を集わせる様態である。

京極邸庭園における語りは、朱雀院による「田居」の家褒め歌と、嵯峨院の樹木褒め、及び邸宅史の保証によってなる。「子の日の松」の成長は、京極邸を叙爵した二院の恩沢にも通じ、統治者による賀歌を得て新生京極邸の庭園空間は完成されるのである。また子の日の松は時間・年齢を表す指標であり、いぬ宮の生長と松の喩はそのまま京極

邸の復興とその後の展開を方向付ける。「姫松」いぬ宮と、成長後の姿を暗示する「子の日の老松」は、ゆくゆく秘琴の力を持つ理想の太后となるであろういぬ宮の下に、宮人が集い、より高次の治世が為る、という次代の政権構造と栄華を予祝する。かつて正頼を中核に繰り返された「樹下の円居」という理想の君臣の場は、近い将来、京極邸において展開されていくのである。

物語の樹形に関しては、次のような未詳本文がある。「楼の上・下」巻、七夕の弾琴直前、俊蔭娘が「俊蔭」巻の杉のうつつほに隠した秘琴を取って来させる場面である。

御座敷かせて、からかさ、かの木のうつつほに置き給うし南風・波斯風を、我弾き給ひ、細緒をいぬ宮、龍角を大将に奉り給ひて、曲の物ただ一つを、同じ声にて弾き給ふ。(九〇五頁)

傍線部の未詳本文「からかさ、かの木のうつつほ」は、諸本は一致するものの、解釈が分かれている。おうふうは文意未詳(九〇五頁)とし、明治書院は「脱文」の可能性を指摘(二三四頁)、角川文庫や小学館は「からかさ」を「尚侍の殿」と校訂する。²⁶⁾『うつほ物語』中の「唐傘」の用例は先の「唐傘の柄」状の滝と二例のみである。「俊蔭」巻のうつつほの大杉は、「いみじう厳めしき杉の木、四つ、物を合はせたるやうにて立てるが、大きな屋のほどに空き合ひてある」(三八頁)と、笠杉を思わせる形状をなし、「仏の現じ給へる所」(四一頁)と、仙境を築いており、京極邸の樹形とも共通性がある。仏教説話にも、聖者の住まいに笠型の木を用いた例がある。一例として『大日本国法華経験記』を挙げる。

苔敷き篠生ひて、量僅に二丈、一の岩洞あり。希有に絶妙なり。

大なる松の樹あり、根は岩の上に宿る。枝葉四に垂れて、洞の前の庭を覆ひ、風の松を吹く声は、音楽に異ならず。雨降れども笠のごとく、庭の上を湿さず。熱き時には松能く清冷の影を作し、寒き時には任運に暖温の気あり。：鹿・熊・獼猴及び余の鳥獸、諸の果・蕨を持ちて、仙人に供養せり。

(第十八「比良山の持怪者連叔仙人」巻上 七六頁)²⁸⁾

聖者の生活空間では、天蓋型の岩松に守られ、松風が音楽となり、鳥獸が供物を供養しており、うつつほの住環境にも似る。「楼の上・下」巻の未詳本文は、「唐傘様の木のうつつほ」の意と解せるのではないか。かつてのうつつほ住みの空間は、「楼の上」巻に至り、仙境の共通語「からかさ」を媒介として秘琴と共に京極邸庭園の中に吸収されている。

おわりに—俊蔭一族と皇統の人々—

このように見ていくと、京極邸の庭園造詣には、君臣和楽の場を演出、提供する意図が見える。そもそも秘琴披露は、嵯峨院の意向によつて設けられた。嵯峨院造型は、強健な嵯峨天皇を準拠とする²⁹⁾といふが、物語でも仲忠は嵯峨院に対しては格別に心を砕き、暇乞いの調見の後にも、「いと恐ろしう、御歳のほどよりは、賢しう、物や仰せらるる君」(「楼の上・下」八六二頁)³⁰⁾とこぼしている。嵯峨院の「恐ろしさ」は京極邸前史をも直接見知り、俊蔭一族全員の音質を知る視点の厳格さにある。嵯峨院の俯瞰視点と眼力は、秘琴伝授の質を外側から支え、見極める一指標でもある。また、『うつほ物語』の「恐ろし」は、東宮も気を置く嵯峨院小宮や、逸脱、異能を孕む者に用いられている。

例えばいぬ宮の卓抜した琴の資質も、

尚侍のおとど、「げに、その御ことをなむ、ここにも思ひ給ふる。いと篤しくもなりにたるを、さらば、早う思し立てかし。いと恐ろしうも、物の心、よう思ひ知りたる様におはすれば、いとよう弾かせ奉り給ひてむ」

〔楼の上・上〕八五〇頁
と俊蔭娘の見極められている。才気を見出されたいぬ宮は俊蔭娘が三年専心して習得した秘琴伝授を、結果的には一年で披露が可能になるまで習熟する。さらに、秘琴そのものも「恐ろしき」ほどの靈威を二院に見せつける。

御手すさびに、緒を一筋鳴らさせ給ふに、響き、いとめづらかなり。「あやし」とて、次の緒を掻き鳴らさせ給ふに、つゆばかりの音もせず、声もなし。「いと恐ろしき物にこそあれ」と、上たちも危ふがり給ひて、几帳の内へさし入れさせ給ひつ。

〔楼の上・下〕九三三頁
院達は秘琴波斯風を弾きこなすことが出来ず、嵯峨院はこれを「恐ろし」と感じて、俊蔭娘に返している。秘琴とそれを弾きこなす異能は、かつて俊蔭が出仕を拒んだ如く、ともすればまつろわぬ家となる諸刃の剣でもある。俊蔭娘が波斯風を奏でる姿は、子の仲忠をして

大將は、いまだ、この年ごろ、聞き給はぬに、「親」ともおぼえ給はず、気恐ろしきまで悲しうおぼえ給ふ。

〔楼の上・下〕九三四頁
と、親ながら畏怖の対象とされており、楽才の特殊性は内外の視座から繰り返し確認されていく。二院をも脅かす威力を持つ秘琴の才能

は、俊蔭一族と皇統の人物との関係に緊張感を生む³¹。仲忠は京極邸再興にあたり、一族の記録の講書と日頃の忠勤³²に加え、内外の邸宅を整備し、人物関係の結びを繕つて、紐帯と協力の土壌を強化してきたが、それは、皇統の持つ世俗の聖性をも脅かしかねない秘琴伝授の脅威を反照している。京極邸の入念な準備は、皇統と俊蔭一族の間に生じる緊張を緩和させる服属の姿勢を示している。また、朱雀院の孫であるいぬ宮の入内がほのめかされる巻末には、異才をもって皇統を支えていく俊蔭一族の、補翼の役割が明確化されてくる。

君臣の調和を意図する京極邸の様態は、「楼の上」巻以後の、東宮といぬ宮を中心に展開する人間関係を雄弁に語り出しているのである。

【注】

- 1 『うつほ物語』の本文は『うつほ物語全 改訂版』（おうふう）に、
- 2 『源氏物語』『萬葉集』は『新編日本古典文学全集』（小学館）による。
- 2 なお、別稿において、「楼の上」巻の京極邸の「しつらひ」からも仲忠の志向性について検証する。京極邸の精美を尽くした「しつらひ」は、秘琴を支援する主家の高徳を反映して、主従関係の結束を確認する場として機能していく。
- 3 「平安初期における貴族の邸宅」〔寝殿造の研究〕第二章 吉川弘文館 一九八七年）
- 4 「楼の上」巻名試論―『宇津保物語』の音楽（『国語語文』六〇―一六 一九九一年六月）。正道寺康子氏も波斯国西方の仙境のイメージや浄土式庭園の要素を見る（『物語作者の思想形成 主題との関連』『うつほ物語引用漢籍注疏洞中最秘鈔』四四〇頁 新典社 二

〇〇五年)。

- 5 『校注古典叢書 うつほ物語五』解説(明治書院 一九九九年)
- 6 「俊蔭一族の物語と楼」(『中古文学』七六号 二〇〇五年十月)。ほかに、江戸英雄氏も正頼や俊蔭一族以外の邸宅にも言及される(『うつほ物語』の邸宅)『うつほ物語の表現形成と享受』勉誠出版 二〇〇八年)。
- 7 「うつほ物語と庭園の問題」(『日本文学』五一―五二 二〇〇三年五月)
- 8 「王の庭園―『うつほ物語』吹上巻から『源氏物語』胡蝶巻へ―」(『源氏物語の生成―古代から読む―』武蔵野書院 二〇〇四年)、「物語の庭園と水の聖域―『うつほ物語』桂邸を中心に―」(『王朝文学と建築・庭園(平安文学と隣接諸学1)』竹林舎 二〇〇七年)。
- 9 俊蔭の京極邸の「しつらひ」と作庭は次のようであった。
一人隠れ居るばかりの屏風・几帳、着る物ばかりは、さは言へど、広かりし所の名残りに、なくなりぬと見れど、なほしつらひてあり。父ぬし、物の器用あり、心憎き所ありし人なれば、家の様をかしう面白かりし所なれば、池広く、植木面白く、草の様・気色などなべてならず面白き所にて…。(『俊蔭』一三三―一三四頁)
- 10 『作庭記』には、大滝の姿は不動明王と脇士の二童子を表す、とある(『日本思想大系 古代中世芸術論』二二三頁 岩波書店 一九七三年)。小山利彦氏は、滝殿のあり方に仙境を見る(『嵯峨御堂の「滝殿」』『源氏物語へ 源氏物語から』笠間書院 二〇〇七年)。
- 11 『日本国語大辞典 第二版』(小学館)には、「まどい【円居】①集まつてまろく居並ぶこと。くるまど。団欒。②ひと所に集まり会すること。会合。特に、親しい者同士の楽しい集まり。団欒。」とある。
- 12 用例は『古今和歌集』八六四番、『後撰和歌集』四五(詞書)、一〇九七・一〇九八番、『拾遺和歌集』五七七番(神楽歌に同)、『古今和歌六帖』にも二例ある。
- 13 本文は『日本古典文学大系 古代歌謡集』(岩波書店)による。
- 14 右兵衛尉元輔、「円居に足らぬ月」、
わが友の野辺の円居に遅るるは過ぎにけらしな春の望月
(一四三―一四四頁)
- 15 本文の引用は『日本古典文学大系』(岩波書店)による。西本香子氏は、仲忠の桂邸における樹下の男宮達、続く女宮達の唱和歌に、孝徳天皇の誓約に似る不変の紐帯と水の聖域の神に対する誓いを読まれる(前掲注(8)「物語の庭園と水の聖域」論)。
- 16 「木々の梢・木々の蔭―源氏物語の庭の景観」(『日本文学』五一―五二 二〇〇三年五月)、「講演録」樹々の蔭」(『学習院大学史料館紀要』一五号、二〇〇九年三月)。
- 17 「うつほ物語の「ひめまつ」の喩」(『物語研究会会報』第一七号 一九八六年八月)
- 18 ほかに、子の成長を松で喩した例が「吹上・下」嵯峨院の吹上行幸に見られる。嵯峨院は落胤源涼の弾琴に感応し、涼を讃えて二人の兄親王達と唱和する。
(嵯峨院)昨日まで二葉の松と聞こえしを陰さすまでもなりにけるかな
(式部卿の親王)根を広み陰も及ばぬ庭の松に枝の並ぶぞうれし

かりける

(兵部卿の親王) 昨日今日岸より生ふる松なれどすぐれてさせる
枝にもあるかな (吹上・下) 二八三頁

19 『新編日本古典文学全集』頭注。また、「姫松」にいぬ宮を、「鶴」に藤壺腹の二人の皇子をたとえる。」ともある。「楼の上・下」巻のいぬ宮の弹琴する姿に対して、母女一宮は、五十日の祝いを「親宮」の、かの五十日の餅参りしほどの、「昨日今日」と思ずに、いとあはれなり。」と回想し、一方、藤壺は、「これを、『わが御子』と思はましかば」(楼の上・下) 九三九頁)と羨む。

20 當麻良子氏「歌語「まつかさ」考(和歌文学研究)八六号 二〇〇三年六月)

21 あて宮の音質は仲忠自身によつて、「誰ならむ。わが手におほえたるかな。『あらじ』と思ふものを」(三二八頁)と確認され、秘琴の後継者仲忠の音質の素地が、源家に通うものであることを示唆している。

22 前掲注(16)「講演録」樹々の蔭」論に同じ。室城秀之氏は、桜に物語の節目と新たな展開を示す象徴性を示唆される(『うつほ物語』の桜「国文学」四六一五 二〇〇一年四月)。

23 前掲注(20)に同じ。『日本古典文学大系』頭注も「上が平たい笠のようになった松」と指摘する。樹蔭の効果については三田村雅子氏(前掲注(16))ほか、正道寺康子氏に一連の聖樹考があり、物語を貫く「生命の樹」思想を示され、京極邸の楼は「宇宙樹の変形」であるとされる(「物語作家の思想形成 主題との関連」『うつほ物語 引用漢籍注疏洞中最秘鈔』解題 新典社 二〇〇五年、『うつほ物

語』の音楽と樹木神話「アジア遊学」一二六号 二〇〇九年九月)。

24 『日本民俗大辞典』(吉川弘文館 一九九九年)「笠杉」の項目には、「笠のような形の杉や、貴人が笠を掛けたという伝説を伴う杉。滋賀県甲賀郡水口町高山には、幹が三つに分かれた杉の大木があり、村人はこの杉を神木として信仰し、瘡山神社としてまつていた。：笠の形をした松や笠を掛けたという松が、神の依代と考えられていたことは共通しているといつて差しつかえない。箒のように枝が広がった木を山の神が宿ると考えて伐採しないということは、木挽の間などで広く聞かれることであり、笠の形をした木が、神の依代とみなされたことは想像に難くない。」とある。

25 本文は『新訂増補國史大系 中篇』(吉川弘文館)による。「」内は割注を示す。

26 比較に用いた注釈書の略称は次の通り。角川文庫(『宇津保物語 下巻』角川書店)、明治書院(『校注古典叢書 うつほ物語五』明治書院)、おうふう(『うつほ物語全 改訂版』おうふう)、小学館(『新編日本古典文学全集③』小学館)。

27 前掲注(24)参照。

28 本文は『日本思想大系』(岩波書店)による。本話は『今昔物語集』にも所載されている。

29 大井田晴彦氏「吹上の源氏―涼の登場をめぐる―」(『うつほ物語の世界』九五頁 風間書院 二〇〇二年)ほか。

30 『うつほ物語』の「恐ろし」の例は、他に阿修羅像(六一一頁)や女二の宮を付け狙い、仲忠を凝視する五の宮、東宮と不和な嵯峨院小宮などがあり、多分に暴威をほらむ。嵯峨院も「ほけほけし」ら

うらうじく、愛敬づ」(八六二・九二七頁)く温顔の下に、老練な人心掌握術を持ち、嵯峨院小宮の処遇について朱雀帝が東宮を諫めているように、なおも政界に隠然たる影響力を持っている。

31 二院は皇統譜への秘琴伝授を望み、秘力を皇統に吸収することで、皇統譜の力を更に強化しようとする。院達はこれまで、東宮、女一宮への伝授を希望し、女一宮腹のいぬ宮への相伝を援護した。

32 仲忠は院達から「行く先の御後見すべき人」(「蔵開・中」五四九頁)と見込まれ、政治や学問面で重用、召喚されており、次のように多忙を極めている。このことも、仲忠の憂愁を深めている。

大将は、院・内裏・春宮・殿と、おほつかなからぬ間に参り給ふ。また、ややもすれば、召され給ふ。心地さへよに心静かなる折なく覺えたまふ。(「楼の上・上」八四八頁)

【要旨】

「楼の上」巻では、仲忠の京極邸再興といぬ宮への秘琴伝授、そして二院行幸が行われる。庭園には「唐傘の柄さしたるやう」な滝と、嵯峨院ゆかりの桜や子の日の老松があり、院の共感体として京極邸の歴史をも語る。いぬ宮関連の儀礼歌には、「姫松」の喩が繰り返され、百日の祝いは嵯峨院大后の六十賀と同じ正月乙子の日に当たる。賢く長命な大后の造型は、嵯峨院同様、秘琴伝授を見定める視点人物であり、いぬ宮の一将来像としてある。また、物語には大樹の下に「円居」する君臣和楽の情景が繰り返し語られる。京極邸の庭園造詣も、大滝、楼閣、大樹群を縦軸に、枝を大きく張る樹形を

横軸にとる立体構造をなし、これは、いぬ宮成長後、京極邸に展開するであろう君臣関係の理想型を具現化、予祝したものと考えられる。また、仲忠の二院への忠勤ぶりは、公式行事化した京極邸再興と秘琴伝授が脅威性を孕むことを示している。

【キーワード】

京極邸庭園 子の日の松 いぬ宮造型 嵯峨院 嵯峨院大后造型

【英文題目】

A study of constitution of the garden in Kyogoku-temple in "The Tale of Utsuhō" — the central point of the relation between the image of Inumiya and the old pine tree.

※ 本稿は、日本文学協会第三十回研究発表大会(二〇一〇年六月二十六日、於フェリス女学院大学)における口頭発表の一部に基づいております。席上、また、発表の前後に御教示を賜りました諸氏に、厚く御礼申し上げます。